

桐朋学園芸術短期大学

平成18年度第三者評価
機関別評価結果

平成19年3月22日

財団法人 短期大学基準協会

桐朋学園芸術短期大学の概要

設置者	学校法人 桐朋学園
理事長	山下 明
学 長	蜷川 幸雄
A L O	篠崎 光正
開設年月日	昭和39年4月1日
所在地	東京都調布市若葉町1-4-1

設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
芸術科	演劇	65
芸術科	音楽	70
芸術科	ステージ・クリエイ	50
	合計	185

専攻科および入学定員(募集停止を除く)

専攻	入学定員
音楽専攻	20
演劇専攻	20
ステージ・クリエイト専攻	10
合計	50

通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

機関別評価結果

桐朋学園芸術短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成19年3月22日付で適格と認める。

機関別評価結果の事由

1. 総評

平成17年7月1日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

建学の精神と教育理念、教育目的と教育目標は一体のものと位置づけている。平成16年度の改組転換を契機に、建学の精神と教育理念を見直し、新たな教育理念の確立に努めている。創設以来、長年にわたり培われてきた基本精神を継承し、時代の変化とともに、新たな方針を導入している。

3専攻とも、技術・技能の修得のみを教育目的・教育目標とはせず、一人の社会人として必要な常識や教養を備え、コミュニケーション力を備えた学生を養成しようとする姿勢うかがえる。多様な学生のニーズに応えるために、教養教育を重視している姿勢もうかがえる。

3専攻とも、専任教員は適切に配置されている。全体的に、卒業要件を大幅に上回る科目数と単位数を提供し、多様な学生のニーズに応えている。学生による授業評価は、非常勤講師も含めて、全教員の全科目で、各期に実施されている。学生も閲覧でき、担当教員の再検討をするなど、授業評価の結果がいかされている。ファカルティ・ディベロップメント(FD)、スタッフ・ディベロップメント(SD)に相当する活動が、毎年行なわれ、また、各種の研修会に参加した委員が教授会などで結果の報告をし、情報の共有化を図っている。学生による授業評価やFDに相当する活動を受けて、「学長対論」も実施し、教員の授業改善の意欲がうかがえる。教員間の調整は、専任教員の研究室を個室という形ではなく、合同研究室として助手を配置した上で、教員間の意思の疎通を図り、非常勤講師にも開放し、情報交換を行っている。学生の教育に対する教員の姿勢は意欲的である。特質上、個人指導の面が強くなるが、創作、演奏、公演など、学生とともに教育活動に熱心である。

成績評価においては、公正性・公平性が保たれている。学生による授業評価を改善の材

料とし、学生の声を聴取し、学生の満足度を高める努力をしている。専門就職の比率は高い。

受験生に対して、大学案内や学園案内で、求める学生像を明確に示している。入学前ガイダンス、入学者に対してマナー講座、入学後に入念なガイダンスを実施している。学生生活支援のために、学生・安全対策委員会を設置して対応している。自治会、学生会は活発に活動している。3専攻とも、専攻科に進学する学生が多い。入学者の約30%の学生が進学・編入学・留学の道を選んでいる。

国際的活動、社会的活動も活発である。芸術系の短期大学として「演奏・演出」などの発表記録の他、年1回、紀要を発行している。研究費の支給は充分といえる。研究日は週2日確保されている。

芸術系の短期大学としての特色をいかして、教育・研究の成果を地域に還元している。音楽専攻の社会人の受け入れも意欲的である。調布市と協定を結び、公開講座、演奏会、発表会などを通じて、共同参画の意欲を示している。学生の社会的活動も盛んであり、地域社会へ大きく貢献している。また、ボランティア活動を活発に行っている。国際交流も活発に行われている。教職員の海外派遣・国際会議などへの出席は、可能な限り、支援している。

学校法人全体の運営を男子部門、女子部門、音楽部門に分け、各部門が自主性を尊重し、責任をもって運営している。3部門制をとることにより、教職員に、「自分たちの学園」、「自分たちの責任」という自覚と意識が扶植され、浸透し、協力体制ができている。理事の構成に偏りはなく、理事会の開催状況も妥当である。事務研修の一環として、毎月、1回、事務職員会議を開催し、学外で行なわれる研修会には参加し、結果の報告をしている。教員と事務職員との連携は円滑で緊密である。各研究室の助手も、橋渡しとしての役割を十分に果たしている。教職員の健康管理にも配慮し、「学内医療規程」を整備し、医療費の補助制度もある。教育環境だけでなく、就業環境についても配慮している。

財務運営に関しては、女子部門運営審議会、女子部門経営評議会、女子部門運営協議会、物件費予算委員会の審議を経て、理事会で決定し、予算化されている。結果の報告は、「理事・事務局長情報」を配布することにより、教職員の全員に周知させている。予算の執行および監査は、適切に行なわれている。財務諸表の公開は、小冊子「学園の財務」を発行し、保護者、短期大学学生、専任教職員および非常勤教職員にも配布され、透明度は極めて高い。災害対策・防犯対策・安全対策・環境対策などに、様々な取組みが講じられている。

平成7年度より、毎年、自己点検・評価を実施し、報告書として発行している。過去1年度、相互評価を実施している。教授会構成員と事務職員の過半数が自己点検・評価に関与している。10年の経過を契機として、過去を見直し、学外の有識者を加えた新しい自己点検・評価の評価システムと評価方法を構築しようとしている。

2. 優れていると判断される事項など

(1) 優れていると判断される事項

評価領域 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

教職員や学生も参加する「学長対論」により、様々なジャンルで活躍する人々と議論することにより、教育目的・教育目標に基づく教育の展開を公開し、確認している。

評価領域 教育の内容

改組転換を契機に、総合ガイダンスセンターを設置し、「スタディ・スキル科目」、「キャリア・デザイン科目」、「芸術文化科目」を開講している。各期に目標設定をしている。個人レッスン、マンツーマンと少人数クラス制による、きめ細かな教育を提供している。「高校生のための演劇セミナー」を実施し、演劇を志す高校生の底辺拡大を支援している。

評価領域 教育の実施体制

教員の担当コマ数は週6コマである。多くの非常勤講師をあてることにより、専任教員の負担を軽減している。教育優先の経営方針が垣間見える。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

桐朋教育研究所を設置し、教育に関わる様々な情報、教職員の研究を促す広報活動、公開講座の実施などを行い、年1回、機関誌『桐朋教育』を発行している。

評価領域 学生支援

志願者・入学者が北海道から九州に至るまで、全国各地に広がっている。短期大学としては稀有である。セクハラに対する対策ができています。学生便覧に「何がセクハラか」を説明し、セクハラ防止、セクハラへの対処、セクハラに対する短期大学側の対応を明記している。

評価領域 研究

芸術系の短期大学である特色をいかした国際的活動、社会的活動が活発である。

「演劇公演の映像による発表」、「音楽の音声による発表」をウェブサイトで公開している。

評価領域 社会的活動

教員と学生の調布市、仙川地区への貢献度は高い。音楽専攻で、恒常的に20名を超える社会人を受け入れている。社会人の受け入れが、正規の学生の意欲を高めるという良い効果を生んでいる。社会的活動は、芸術系短期大学の特色をいかし、音楽専攻

が保育園・幼稚園・小学校などで「読み聞かせコンサート」、病院・施設で慰問演奏を実施している。キャンパス内でも、コンサートや演奏会を実施し、地域へ貢献している。地域の子供から高齢者に至るまで、地域の人々に対して、様々な貢献をしている。海外機関との双方向の国際交流が活発である。「日本音楽専修」があることで、双方向の交流が可能となっている。ゲスト・スピーカーの招聘が盛んに行なわれている。

評価領域 管理運営

3部門の独自性をいかすことにより、各部門が発展を遂げてきた。教育の展開、各部門の相互理解、教職員間の信頼、選挙による理事の選出など、教職員の民度が高い。

評価領域 改革・改善

過去17年間、毎年、「自己点検・評価」を実施し、「報告書」を発行している。

(2) 向上・充実のための課題

評価領域 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標は、入学前から卒業後に至るまで、短期大学教育の基軸となるものであるから、全教職員の共通理解と共有化を図る努力を今後とも継続することが望ましい。

評価領域 教育の内容

講義要項・シラバスの記載にばらつきが見られ、改善が望まれる。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

就職先の企業、編入学先の大学などからアンケート調査を実施し、情報を収集・分析し、今後の取組みに反映させることが望ましい。桐朋教育研究所は、11の教育機関を擁す桐朋学園の教育の展開を俯瞰し、将来の教育を展望するシンクタンクとして機能できないか、検討することが望ましい。

評価領域 学生支援

学生の休息空間・自習室などの必要性について検討することが望ましい。

評価領域 研究

グループ研究、共同研究の実施、科学研究費補助金やその他の機関から研究費を調達する工夫が望ましい。過去3ヶ年研究業績がない教員については、研究活動が行われない理由を明確にし、短期大学の教員の責務である教育と研究に励むように指導する

ことが望ましい。教員に個室の研究室を用意することが望ましい。

評価領域 管理運営

欠席理事・評議員に委任状無の例が散見されるが、確実に委任状を提出するように改める必要がある。

評価領域 財務

支出超過の解消に向けた努力が望まれる。

(3) 早急に改善を要すると判断される事項
なし

領域別評価結果

評価領域		評価結果
評価領域	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域	教育の内容	合
評価領域	教育の実施体制	合
評価領域	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域	学生支援	合
評価領域	研究	合
評価領域	社会的活動	合
評価領域	管理運営	合
評価領域	財務	合
評価領域	改革・改善	合

評価領域 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

建学の精神と教育理念は一体と捉えている。建学の精神、教育理念ともに確立され明示されている。また、桐朋学園の教育には、専門的な高等教育としての芸術教育があり、桐朋学園芸術短期大学と桐朋学園音楽部門」の教育で展開されている。

教育目的と教育目標は一体と位置づけている。教育目的・教育目標ともに確立され明示されている。毎年、自己点検・評価委員会で全学的に点検している。特に、学生による授業評価を重視し、点検の材料としている。

教育目的・教育目標の共有と共通理解に努めている。学生・全教職員・教授会・理事会だけではなく、非常勤講師にも理解と共有の徹底を図るために、学生便覧、ウェブサイト、ガイダンス・プログラム、学内広報誌、学長対論、全教職員対象の説明会、オープンキャンパスの全学説明会などで公表し、教育目標の達成度を点検している。平成16年度の改組転換を契機に、建学の精神・教育理念を見直し、新たな教育理念の確立に努めている。創設以来、長年にわたり培われてきた基本精神を継承し、時代の変化とともに、新たな方針を導入している。3専攻とも、技術・技能の修得のみを教育目的・教育目標とはせず、一人の社会人として必要な常識や教養を備え、コミュニケーション力を備えた人物を養成しようとする姿勢がうかがえる。活字を通してだけでなく、口頭による共有化の努力もうかがえる。

評価領域 教育の内容

建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標が反映された教育課程が体系的に編成さ

れている。芸術教育と広義の社会教育の意味も含めた、教養教育の取組みもなされている。教育課程は、短期大学の専門教育としての内容を充実している。専任教員は適切に配置され、卒業要件を大幅に上回る科目数と単位数を提供している。短期大学に相応しい内容とレベルである。単位の認定と評価は、恣意的な判断はせず、厳正に行っており、公正性と公平性を確保している。教育課程の改善は意欲的で、組織的に対応している。見直し・改善は、毎年、専攻会議で検討し、学生の意見をとり入れて、充実を図っている。

免許、資格の取得は、音楽専攻で、中学校教諭二種免許状（音楽）が取得できる。講義・演習・実習のバランスは、十分に配慮され、必要に応じて、適切に開講されている。音楽専攻は、必修科目の占める割合が少し高いが、必修科目と選択科目のバランスはとれている。学生が自由な判断で履修計画が立てられ、学生の選択の意志が十分に配慮されている。クラス・サイズは、個人レッスン、マンツーマン、少人数クラス制の授業が多く設定されている。卒業要件単位数は、音楽専攻が64単位、演劇専攻が72単位、ステージ・クリエイティブ専攻が62単位である。授業に対する学生の意欲は、積極的で、履修態度にも意欲が見受けられる。

講義要項・シラバスと学生便覧の合冊として、全学生に配布している。講義要項（シラバス）の記載項目は、履修条件、授業計画、授業の概要、教科書・参考書など、成績評価の6項目であるが、記載にばらつきがみられる。

学生による授業評価は、前期末、後期末に、専任・非常勤全教員の全科目で実施している。授業評価の結果を受けて、教員は授業改善に向けた自己点検を進めている。委員会などの組織としてのFDはないが、FDに相当する活動を実施している。授業改善に向けての取組みは、教務・入試委員会が担当している。教員の授業改善への意欲を高めるために、学外からゲストを招いて、「学長対論」を公開で実施している。多くの教職員と学生が出席し、短期大学の今後の教育・研究のあり方を考える機会となっている。外部から招聘の芸術家から、様々な教授法を学ぶ機会ともなっている。3専攻とも、教員が一室を研究室として共有し、日常的に会議を開催し、教員間の意思の疎通・協力・調整をしている。非常勤講師と専任教員および事務局との橋渡しとして、助手が大きな役割を果たしている。

SDは委員会などの制度としては整備されていないが、毎年1～2回、SDに相当する活動を実施している。各種の研修会へ参加した委員から、教授会などの場で報告を受け、情報の共有化を図ってきている。

評価領域 教育の実施体制

教員組織は短期大学設置基準を充足している。教員としての資格、経歴、業績、資質に問題はなく、採用・昇任は規程に基づいて行なわれている。授業に対する姿勢は意

欲的で、研究活動も活発である。オフィス・アワーを設定し、個別の指導にあたり、教育研究上の業務も全教員が参加している。事務助手として合計3名、補助職員として合計3名を配置している。各専攻は主任制度をとり、教育実施の責任は教務部長が担っている。

校地・校舎面積とも、短期大学設置基準を充足している。

図書館の広さについては、不便さはない。専任教員の「研究課題展示ショーケース」を設置し、図書館の利用を高めている。学内外へ、年1回、小冊子を発行している。桐朋学園大学音楽学部図書館との相互利用を通して、楽譜、図書などの借り出しを実施している。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

単位認定の方法と評価に関して学生便覧に詳細に明記し、非常勤講師にも文書で通知している。年間取得目標単位数を指導し、学生一人ひとりに点検させている。学生の授業に対する満足度への配慮については、組織サイズの利点をいかして、日常的な学生との対話で学生の声をリサーチできており、迅速な対応が学生に満足を与えている。授業評価の結果などを踏まえて、授業の進行を工夫し、学生の満足度を高める努力をしている。退学者は経済的理由および進路変更が主である。退学者の中には、経済的理由によるほか、オーディションに合格して退学する者もいる。留年者には、教職員が履修登録の時期や学習状況に留意し、指導と助言を行っている。資格取得の取組みとして、「パソコンインストラクター養成講座」、「情報処理資格取得講座」を開講している。音楽専攻に、音楽療法士養成課程の設置を検討している。他の大学からの編入学制度はない。

3専攻とも、専門就職の比率は高い。就職先からの評価の聴取は行っていないが、不評・苦情が届いた例はない。卒業生との接触や同窓会との連携は深く、同窓会のサポート体制も強い。編入学先からのアンケート調査などは実施していない。

成績評価は、公正・公平に行われている。

評価領域 学生支援

短期大学が求める学生像は明示されている。入試の種別は推薦入試、一般入試で、アドミッション・オフィス(AO)入試は実施していない。音楽専攻は、社会人入試を別枠で実施している。入試事務の体制、受験生への対応、入試に関する広報・事務は教学課と総合ガイダンスセンターが担当している。推薦入試による入学予定者には入学前ガイダンス、入学者に対しては、入学後のオリエンテーションを行っている。

学習の動機づけとして、詳細なガイダンスを実施し、教員が個別に対応し、学生生活

全般について詳細な説明と相談を行っている。学生便覧は講義要項・シラバスと合冊で発行している。基礎学力が不足する学生に対する支援は、各教員が授業やオフィス・アワーを利用して、実施している。問題を抱える学生の指導と助言は、日常的に、専任教員間の連携で行っている。優秀な学生に対する支援は、個々の学生の学習内容や進度に合わせて行い、学生の意欲を高める結果に繋がっている。

学生指導のための組織として学生・安全対策委員会を設置している。サークル活動、学園行事などへの支援体制としては、桐朋祭、新入生歓迎行事、クリスマス会、卒業関連行事へ、補助金を支援している。学生のための休息空間は少ない。食堂および購買部は、整備されている。学生寮および通学バスはない。学園独自の奨学金制度として、桐朋演劇奨学会奨学金があり、授業料の半額程度を給付している。学生の健康管理、メンタルケア、カウンセリングなどのシステムは整備されている。健康相談は、月2～3回実施している。スクール・カウンセラー室を設置し、臨床心理士との面談日を設けている。学生生活に関する学生の意見・要望の聴取も行っている。

就職支援は、総合ガイダンスセンターが担当し、適切に行われている。

過去3ヶ年、留学生の受け入れの実績はない。音楽専攻で、社会人を受け入れている。過去、視覚障害のある学生を受け入れた例があるが、必要に応じて、特別の措置をとってきている。長期履修生の受け入れの制度はない。

自治会、学生会は活発に活動しており、自治の精神を継承し、自律と自立を育み、責任感や社会性を身につけることに繋がっている。

評価領域 研究

教員の研究活動は、学長を筆頭に、大きな成果をあげている

芸術系の短期大学であるため、「演奏・演出」の分野が抜群である。国際的活動、社会的活動も活発である。「演奏・演出」などの発表記録の他、年1回、紀要を発行している。教員の研究費・研究経費は、研究研修規程に則っている。研究費の支給は、一律ではないが、充分といえる。研究成果を発表する機会は、紀要、ウェブサイトが主体で、整っている。教員の研究室は個室として設置されていない。研究日は週2日確保されている。

評価領域 社会的活動

芸術系の短期大学としての特色をいかして、教育・研究の成果を十分に地域に還元している。音楽専攻の社会人の受け入れも意欲的である。調布市と「相互友好協力協定」を結び、公開講座、演奏会、発表会などを通じて、共同参画の意欲を示している。学生の社会的活動も盛んである。調布FMの番組制作、地域の夏祭りへの参加などを通

じて、地域社会へ大きく貢献している。地域の保育園・幼稚園・小学校をはじめ、病院・施設などで、貴重なボランティア活動を活発に行っている。音楽専攻では、アメリカ、イギリス、ハンガリーの教育機関と交流している。客員教授やゲスト・スピーカーの招聘も実施している。演劇専攻では、イギリス、ノルウェー、オーストラリア、カナダの教育機関と交流している。教職員の海外派遣、国際会議などへの出席は、可能な限り、支援している。

評価領域 管理運営

教授会は教授会規程に則り、定例および臨時の教授会を開催している。教授会は1か月1回の定例教授会とし、必要に応じて臨時教授会を開催している。学長はリーダーシップを発揮している。規程に基づいて、合計12の委員会などを置いている。学校法人全体の運営を3部門に分け、各部門が自主性を尊重し、責任をもって運営している。理事会、監事、評議員会とも、寄附行為に則って運営されている。理事の構成に偏りはなく、理事会の開催状況も妥当である。欠席理事・評議員に対して、予算・決算などの重要議案の説明も行っている。事務組織は、「女子部門」の5教育機関で、効率の高い事務組織となっている。事務研修の一環として、毎月1回事務職員会議を開催し、学外で行なわれる研修会には参加し、結果の報告をしている。3部門制をとることにより、教職員に、「自分たちの学園」、「自分たちの責任」という自覚と意識が扶植され、浸透し、協力体制ができている。教員と事務職員との連携は円滑で緊密である。各研究室の助手も、橋渡しとしての役割を十分に果たしている。教職員の健康管理にも配慮し、年1回、健康診断を実施している。「学内医療規程」を整備し、医療費の補助制度もある。教育環境だけでなく、就業環境についても配慮している。事務部門の規模と事務職員の任用は規程に基づいている。事務部門の諸規程は整備されている。事務室、情報機器、施設・設備は、おおむね整備されている。決裁処理、公印や重要書類の管理、防災、情報システムの安全対策などに関する諸規程が整備されている。使用頻度の高い学籍簿などの重要書類は特殊倉庫を設置し、管理強化を図っている。防災対策は、保安委員会を組織し、対応している。情報システムのセキュリティ対策がとられている。

評価領域 財務

事業計画は、女子部門運営審議会、女子部門経営評議会、女子部門運営協議会、物件費予算委員会の審議を経て、理事会で決定し、予算化される。結果の報告は関連各会議で行い、「理事・事務局長情報」で、全専任教職員に報告している。財務の公開は、理事会前に関連各会議に提示した後、理事会に提出し、結果の報告は関連各会議で行

なわれ、「理事・事務局長情報」で、全専任教職員に報告される。毎年3月、決算に関して解説をした小冊子「学園の財務」を発行している。学校法人としての公開は、改正私立学校法による財務などの公開に対応するため、規程を定め、平成17年度より、対外的な公開も行っている。

財務運営に関しては、女子部門運営審議会、女子部門経営評議会、女子部門運営協議会、物件費予算委員会の審議を経て、理事会で決定し、予算化されている。結果の報告は、「理事・事務局長情報」を配布することにより、教職員の全員に周知させている。予算の執行は、26の財務諸規程に則り、評議員会・理事会の議に付し、適切に行なわれている。法人監査会を開催し、公認会計士や監事の確認も問題なく行なわれている。監査の回数も頻繁で、過去3ヶ年の監査の結果、不適正な事項はなく、無限定適正となっている。資産および資金の管理と運用は、寄附行為に則り、安全に保管・運用されている。財務諸表の公開は、小冊子「学園の財務」を発行し、保護者、短期大学学生、専任教職員および非常勤教職員にも配布され、透明度は極めて高い。財務体質に関しては、消費収支計算においては、支出超過が目立つので留意が必要と思われる。

評価領域 改革・改善

平成7年度に、「自己点検評価規程」、「自己点検評価委員会規程」を作成し、自己点検・評価報告書として公刊した。自己点検・評価報告書は、毎年、発行し、点検・評価の結果を確認し、桐朋学園内の関係部署、関係協会へ配布している。

平成16年度より、教授会構成員の過半数が自己点検・評価に関与し、全学体制で取り組んでいる。自己点検・評価の結果を踏まえた改善・改革の推進は、各機関の対応に委ねてきた面がある。自己点検・評価に関する理念や意義の検討、実施方法の改善へ向けての反省とともに、新たな評価システムと評価方法を検討している。

平成14年度に、鹿児島国際大学短期大学部と相互評価を実施した。学内に自己点検・評価の厳しい目が育っていなかったこともあり、評価結果の活用は期待していたほど進まなかったのが事実である。相互評価のための規程は作成していない。今後は、学外者の様々な意見を取り入れるシステムを構築し、諸施策にいかしてゆく何らかの方策の導入を検討している。